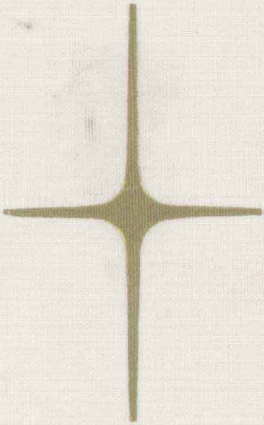


もし落丁、乱丁その他不良品がありましたら、おとりかえ
します。お買い求めの書店か本社へお申しいでください。

10冊の本 3

古典へのいざない

定価 五五〇円

昭和四十三年十一月五日 発行

編者 井上靖
臼井吉見

発行者 石川数雄

印刷所 凸版印刷株式会社

発行所 株式会社 主婦の友社
東京都千代田区神田駿河台一の六
郵便番号一〇一
振替 東京一八〇番
電話 東京(294)一一一一(大代表)

© 主婦の友社 1968 Printed in Japan

古典へのいざない

国宝「源氏物語絵巻　柏木第三段」(部分)

〔12世紀前半、21.9×48センチ〕

東京　徳川黎明会蔵

撮影　三上四郎

「源氏物語絵巻」はあらゆる意味で、日本絵画史上の最高名宝の一つである。源氏物語自体が平安時代が生み出した香り高い民族文学の傑作であると同様、大和絵という独自の絵画様式の特質を最大限に発揮して、この物語を描き出したこの絵巻は、豊かに典雅に、そして優麗微妙に、王朝美学の最も純粋なあらわれである。

単純と華麗と、抒情と象徴が、互いに内に響き合う不思議な旋律とも言えよう。「柏木第三段」の場面は、源氏が薫(かおる)の五十日(いか)の祝いに、幼い薫をだいて宿命を嘆いている情景である。(嘉門安雄)

古典へのいざない／目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

上代
万葉の世界　今井邦子…9
中古
源氏物語の魅力　中村真一郎…49
源氏物語と私の青春　島津久基…50
源氏物語を語る　中村真一郎訳…68
若菜上・下　中村真一郎…130
源氏物語の美と倫理
無類の短編小説集「堤中納言物語」
虫めづる姫君　川端康成訳…154
堤中納言物語の鑑賞　小島政二郎…168
中世
革命の悲歌「平家物語」　冨倉徳次郎…213
平家物語のあらすじ
大原御幸・訳
寂光院を訪れて

最高のエッセー「徒然草」
——解説と訳——　臼井吉見…257
新古今のもつ詩美　石田吉貞…275

近世

芭蕉の俳句の味　小島政二郎…299
郷愁の詩人・与謝蕪村　萩原朔太郎…323
西鶴と世間胸算用
——「小判は寝姿の夢」「平太郎殿」の訳と鑑賞——　暉峻康隆…335
近松門左衛門の文学　ドナルド・キーン…363
〔詩〕香具山にのぼりて／釈迢空7　修辞学／芥川竜之介46
総角／催馬楽より256　楽しみは／橘曙覧362
〔短歌〕子供らと／良寛298
〔俳句〕添乳／小林一茶334
〔グラフ〕源氏物語絵巻「柏木三」1　大原の露／下村観山211
卯月の芭蕉庵／小川芋銭309　〔解説〕嘉門安雄

解説

日本古典文学のたのしさ、おもしろさ　臼井吉見…385

香具山にのぼりて／釈迢空

秋風の吹き白む日を
しづかなる村々　よぎり、
我ひとり　山に入り行く。
いにしへの　天の香具山。

尾の上には　松風とよみ、
田居見れば、水漬くひつじ穂—。
そのかみも　かくやありける。

若ければ　悲しみやすく—
わぶれども　恋ふるにあらず、
ひたすらに山にのぼりて、
おほけなく　世をぞ　なげきし—

釈迢空〔明治二十～昭和二十八年（一八八七～一九五三）〕国文学者、歌人。大阪に生まれた。国学院大学卒。同大及び慶大教授、文博。本名は折口信夫。釈迢空は歌人としての筆名。「香具山にのぼりて」は詩集「古代感愛集」（日本芸術院賞受賞）に収録されたもの。ルビのかたかな書きは著者の生前の主張に従った。

ひさかたの　天の香具山。

今見れば　木高(コダカ)く繁り、
そのかみの道も　埋(クモ)れぬ。
　世を思ふ年になりつゝ、
　我が心　今し　はかなし。

あはれなる思ひを守(モ)りて、
たゞひとり　息づきのぼり、
水漬き田を　現目(マサ)に見おろし、
松風の梢(ウレ)を仰ぎて、
　さびしさは　いよゝきはまる。

　さびしさのきはみにありて、
何しかも、心赫(カカヤ)き　満ち足(クラ)ひ来る
ものゝあはれさ

万葉の世界

今井邦子

今井邦子〔明治二十三〜昭和二十三年(一八九〇〜一九四八)〕 歌人。徳島市に生まれ、少女期まで父の郷里長野県下諏訪で育ち、のち上京して中央新聞の記者となった。明治四十四年(一九一一)今井健彦と結婚。早くから文芸に親しみ、『女子文壇』に投稿、のちに島木赤彦のすすめで『アララギ』に参加し、赤彦没後は斎藤茂吉にも師事したが、一九三六年に歌誌『明日香路』を創刊、後進の育成につとめ、昭和の代表的女流歌人となった。著書は歌集「片々」「光を慕ひつつ」「紫草」「明日香路」「こぼれ梅」等のほか、「万葉読本」その他がある。本編は「万葉読本」から抄録したもの。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

感動の歌集

万葉集[1]といえば、今からいって千年も以前の人々からさえ、なかなか難解な歌集と思われておりました。それにもかかわらず、歌やその他の文学を愛好する人々によって、たとえその量はわずかしか解されなかったといえども、その価値を高く買われ、その味の深さに驚嘆されておりました。

即ち平安朝時代から今日に至るまで、その読み方なり、解釈なりにどうしてもわからないというものがあるところをみると、なるほど難解な書であることは事実ですけれど、私はその難解な点にふれてここでかれこれ言うつもりはありません。嵐雲が厚く空をおおうているとしても吹き切られた雲の間に真青な空が現われて見えます。

そういうように、私は自分に深く印象を受けた万葉集の歌ばかりについて、多くの人にわかるように解釈して、せめて、我が国の万葉集というものが、いかに得がたい古典文学であるかということの、ほんの端緒を知っていただきたい願いで、ごくわかりやすいその解釈と鑑賞の筆をとってみようと思います。

キリスト教のうちの新教の創立者であるマルチン・ルーテル[2]は、聖書はわかってもわからなくても読む方がよろしい、わからないところは帽子を脱って、礼してそこを通りすぎ、わかるところはわかるよろこびを得てゆくように、という意味のことを言われておりますが、これは

全くおもしろい言葉で、人間の身をもって初めて聖書を通読したところで、その深奥な神の道が全部すぐ解釈出来るものではない。一つ二つなりと感動したものを受けることによって、やがてその大いなる命をうけるのであって、難解な書として捨ておけば、ついにその貴い宝を踏み荒らして通ることになってしまう。

それとちょっと似たような気持ちで、私は万葉集の歌を味わい得るものは幸いであって、だんだんくりかえして読んでいるうちに大きくわかるようになり、その貴い価値を感受するようになるのだと思って筆をとるのであります。

不可解な本を読んでみるような動機は、極めて不思議なことによって、あるいは簡単なことによって、縁の糸に結ばれるのだということが出来るでしょう。

私がそもそも万葉集というこの無尽蔵な宝庫に入る一番初めは、たしか明治四十二年ころと思いますが、そのころ夢中で愛読しておった女子文壇という唯一の婦人文芸雑誌があって、そこに与謝野晶子さんがいろいろの時代の歌を解釈している中に、万葉集の中から一首、今にして思えばあの有名な額田王の

(20) 茜さす 紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る(編注 歌の番号は「国歌大観」のそれである)

1 現存最古の歌集、二十巻。既存の多くの歌集を大伴家持が集め、家集を加えて原形を作り、その後も数人の手が加わって現在の形になったようだ。成立は奈良朝末か平安朝初め。仁徳天皇から淳仁天皇時代まで、四、五百年間のあらゆる階層の歌、約四千五百首を収録。

2 (一四八三〜一五四六)ルッター、ルターの読み方もある。ドイツの宗教改革者。ローマ教会伝統の免罪符に疑問を持ち、教会制度の改革を強く主張し、ローマ教会に代わるプロテスタント教会を組織拡大した。

の一首が評されてありましたが、私はその評をほとんど一つも記憶しておりません。ただわけはわからないが、この歌のもつ文字の美しさ、およびその調べのいかにもリズミカルな快さのなかに、何かわけはわからないが、心をうたれる深味があって、「まあ！」と叫んで驚嘆したほどの感動をうけ、こんなよい歌が書かれてある万葉集という歌集を読んでみたいものだとしきりに願うようになりました。

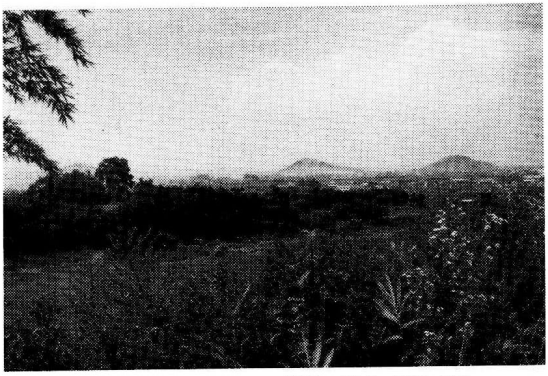
もとより万葉集の名は歴史的に学校でも習いましたけれど、そのころはとてもとても現代のように一般的には盛んでないころ故、山深い田舎の少女などには手に入れる術もなく、同時に現代のように行き届いたその手引き書もなく、誠に思うだけで手に入れがたいものでありました。

忘れもせぬその女子文壇という雑誌は、詩や歌や文章が募集してあって、私や亡くなった三宅やす子さんや神近市子さん、若山喜志子さん、生田花世さんなど前後しての投書家で、そこで一等に入選するとお金が十円(そのころにしては大金)もらえるのですが、私は幾度もその十円を受けたことがありました。

それである時、その編集長である河井酔茗氏に手紙を出して、その時もやはり一等に当選しておったので、お金はいらないから、もし出来たら万葉集と源氏物語が欲しいのであるが、お金が不足な場合は万葉集だけでも送っていただけまいかという申し込みをしたところが、一週間ばかりすると、私の家に向かって坂道を上って来る郵便脚夫が、渋紙包みの大きな荷物を重そうにかついで来て「小包」と叫んで玄関にほうりこんで行ったのです。

私は何事かと思って玄関に出てみると、その投げこまれた大きな包みは、私の名あてで送られたもので、東京の女子文壇社の判がおしてありました。

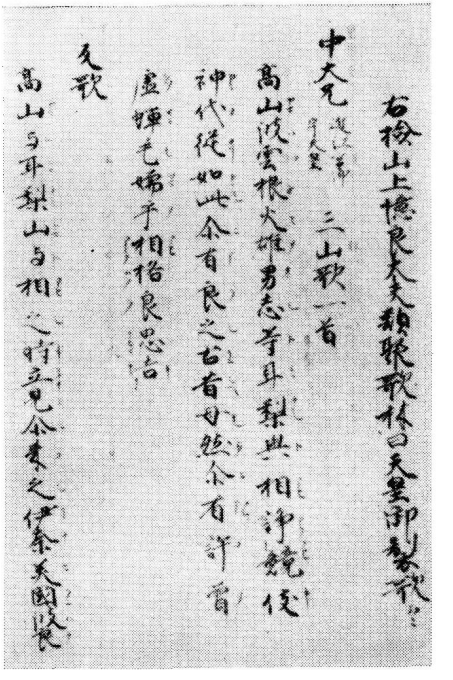
私ははっととりのぼせてしまった気持ちで、いそいで包みをといてみますと、なかには帙入りの上下、二帙に分かれた万葉集と、二帙に分かれた源氏物語であって、万葉集は橘千蔭の万葉集略解であり（修学院発兌）、源氏物語は湖月抄のそれでありました。



大和三山。向かって右より耳成、畝傍、天香久山。
いずれも標高200メートル以下の美しい山々。

私は何か夢みる心地で、まず万葉集の四冊に分かれた一番上の一冊をとびつくようにしてひらいてみましたが、驚きました。私もとりのぼせておりましたことですが、帙入り本のこの略解をお読みになった方があればご承知でしょうが、全文が四号か三号くらいの万葉仮名で、そのわきに平仮名で、その読み方を書いてあり、釈は非常に簡単で、よほど万葉集に通じてからでなければ、初めて読んだ私などにはまず開いた一ページに一つも解るところのない驚きをいたしました。

私はかつて感激した「茜さす」の歌を探してみますと、その歌は第一巻のよほど初めの方に書かれてあ



西本願寺本万葉集の一部分
中大兄(天智天皇)の御歌
(巻一の一三、一四)

香具山は　畝火を愛しと、
耳梨と　あひ争ひき。
神代より　かくなるらし、
古昔も　しかなれこそ。
うつせみも　妻を　争ふらしき

反歌

香具山と　耳梨山と　会ひし時、
立ちて見に来し。印南国原

り、その歌はすぐ読めて非常に懐しいものに出会ったような喜びを味わって、幾度もよみかえしました。しかしその註釈はごく簡単で、その当時の私にはやはり何のことか解らないのですが、ただその歌は私の感動をゆすぶるのです。

それから私はこれはもう解らぬながらも無茶苦茶によめるだけ読みとおしてみようと、第一巻の一番はじめ「籠毛与。」(現代は多く「籠毛与。」と読ませる)から始まって一向にわからない、全く砂地を行くような思いで読みすすんでゆきました。

ある時には余りの悲しさ、やるせなさ口惜しさに右手に持っておった鉛筆をいきなりページ

の上にギリギリとさすようにして泣きながら、それでもわからぬ先へと歩みをつづけて行きました。

この略解本は今も私の手許にあって、時折りに取り出してみる時、その鉛筆のあとのギリギリとついたところへゆくと、今でも私は涙ぐまされることです。

名張の山と三重県名張市。

忘れもせぬ第四巻の少し初めの方にある歌ですが、

(511) 吾背子は何処行くらむ奥つ藻の名張の山を今日か越ゆらむ

この歌は第一巻にも書かれてある歌ですが、その時は全くわからなくてすごしてしまいましたが、第四巻にまた出て来たこの歌のところに来て、何か私の心をうつものがありました。

万葉集の古い時代の人の歌の詠み方、いわばその調子や表現などに実に豊かなものが含まれており、深い心のまことから詠みいだされたものであるということが理屈でなしに自然にうすらうすらと光を放って来るかの如く、私に「よい歌だな」というなずきが出来、教えられるものが理屈や理論では言いあらわせないと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com